

エコロジカルな生涯学習の可能性

—G.ベイトソンのコミュニケーション論を契機として—

安 川 由 貴 子

1. はじめに

本稿では、グレゴリー・ベイトソン（1904～1980）の展望する「エコロジー」に関わる概念に着目してそれらを整理し、そのエコロジカルな考え方を生涯学習の実践へとつなげていく手掛かりを得ることを目的としている。筆者はこれまで、G.ベイトソンのコミュニケーション論の中でも特に「学習とコミュニケーションの階型論」に焦点を当てて、生涯学習へと生かしていくあり方を探ってきた¹⁾。そこでは、「自己」というものを、個として独立した完結的な自己としてではなく、自己をとりまく環境をひとつの全体として含む込み、自己修正しながらすすむ、コミュニケーション・システムとして捉えていくことが提示された。また、目的的思考に対して、行為そのものの中に意味を見出すような、非目的的思考へと開かれる可能性も見出された。一方、学習の階型論では非連続により大きなコンテキストへと飛躍して生成していくような学習のプロセスが示されているが、そこにおいて、経験の連続体が区切られていく区切り方の変化であり、習慣を形成させていく階型である「学習Ⅱ」の階型と、それら学習Ⅱのコンテキストの区切り方自体が修正されていくような変化であり、〈自己システム〉が〈エコシステム〉の中に溶出していくような階型である「学習Ⅲ」の階型との関係を明確にすることが十分にできなかった。この課題に答えるために、ベイトソンの考える「エコロジー」に一旦焦点を当てて探究していくことによって、ベイトソンの独自性が見出せる「学習Ⅲ」の概念のより深い理解へと反映させることができるだろうと考えている。

また、生涯学習の分野では、一方向的な「教育—学習」環境を変えていくために学習者である自己や個人がいかに主体的になっていけるかということに焦点を当てた、自己や個人を中心とした学習理論の研究が主流としてなされている。しかし、その「自己」概念を問い直してみること、自己と他者あるいは環境との関係性の中で学習を捉えていくことも必要なのではないか。ベイトソンのコミュニケーション論はこの問いに応えうる理論であり、学習の中から生まれてくる意味をも新しく捉えなおしていくことのできる可能性をもったものであると考えている。

次に、なぜベイトソンの学習の階型論と関わって、ここで「エコロジー」の概念に着目するかということである。それは先にも述べたように、ベイトソンの「学習とコミュニケーションの階型論」をより深く理解すること、特に「学習Ⅲ」の階型への示唆を深めることと、ベイトソンの「エコロジー」についての理解を深めることは、同時並行的なものであると考えるからである。ベイトソンのコミュニケーション論において、「エコロジー」とは彼の思想全体に通じている観念である。ベイトソンにとって、「エコロジー」とは「精神のエコロジー」という方が正確なのであるが、デカルト的な物心二元論や唯物論に批判的であったベイトソンが到達しようとし

たひとつのオルタナティブの形として「精神のエコロジー」を提起したのだといえる。したがって、このようなベイトソンの「精神のエコロジー」の概念に注目することは、ベイトソンの確信に迫っていく試みでもあると考えている。

2. 思想家としてのベイトソン

2.1. 超自然論と機械論を超えて

ベイトソンは、文化人類学、生物学、精神医学などの分野を脱領域的に渡り歩きながら、私たちの生きた世界の「結び合わせるパターン(the pattern that connects)」を求めて探究を続けた思想家である。ベイトソンは、世界が個別の実体を基本的構成要素として成り立っているという前提を徹底的に洗い直そうとし、さまざまな関係性を含む関係のネットワークを前提にした理論を提示しようとした。それは、いわゆる分離した「個体」ではなく、「関係」に注目する科学であり、ホリスティック（全体論的）な思考に基づく科学であるといえる。

ベイトソンが疑問を呈していたのは、従来の機械論的、唯物論的、二元論的な問いの立て方である。ベイトソンは、「a "精神"と"物質"とを分離するデカルト的二元論、b"パワー""テンション""エネルギー""ソーシャル・フォース"等、精神現象を語る際に使われる奇妙に物理的なメタファー、c 精神現象を含むすべての現象が、量的に捉えられる、また評価しうる、そしてそうするのが当然であるという、反美学的な思い込み²⁾」に対して批判的であった。なぜなら、精神と身体を分離して思考すれば、人間は機械論的にしか捉えることができず、生身の人間としての繊細で変化に富んだ部分が捨象されていってしまうからである。また、デカルト的な思考は、ものごとを科学的に理解するさいの〈量〉の重視をもたらしたからである。その結果、「科学の研究対象たる物質領域から多くの重要かつ神秘的な現象がはずされて、精神は身体から切り離され、神は創造からしめだされ、両方とも科学的思考の無視するところになった³⁾」のである。

他方、ベイトソンがデカルト的二元論に批判的で「精神」のシステムを重視しているという理由から、ベイトソンの理論は超自然的な考え方を擁護する立場の理論であると誤解される傾向もあるが、ベイトソンは超自然論に対しても強く批判的である。ベイトソンは、これら機械論と超自然論とを密接な関係のある両極の論であるとし、「量がパターンを規定するというのと、精神が物質に対する支配力をもつというのとは厳密な補完関係にあり、しかもどちらもまったくのナンセンスだ⁴⁾」と考えていた。そして、いずれの極論に対しても認識論的に稚拙で間違っており、政治的に危険であり、私たちが大雑把に精神衛生と呼ぶ何かにとっても危険であるとベイトソンは考えていた⁵⁾。

そうしてベイトソンが展望していたのは、それら二つを統一させるような、精神と物質がひとつの統一体（エティ）になった一元論であったといえる。ベイトソンにとって、「その一元論とは、精神と自然がひとつの必然的統一体（エティ）をなすもので、そのなかでは身体と離れた精神はなく、創造と離れた神はいない、との確信⁶⁾」をもったものであった。ベイトソンは、近代的科学に批判的であったものの、科学そのものを否定したのではなく、むしろ、これまで科学の対象から切り離されてきた「精神」という言葉について、ベイトソンの考える「精神のエコロジー」の観念を取り込んだ形で、科学の中できちんと語り直し位置づけようとしたのである。それでこそ、私たちの〈生きた世界〉を正面から捉えていけると考え、新しい見方で世界を捉えていけると考

えていたといえる。そして、これまで科学の埒外に置かれていた美と醜、逐語性と隠喩性、正気と狂気、ユーモラスとシリアス、さらには愛と憎しみといったような⁷「生きたネットワーク」の多くの事柄についても眼を向けていくことができると考えていたのである。言い換えれば、「知識や芸術のなかに、自然の一体性（エティ）をよるこびとするような聖の肯定の基盤を見いだせないものか⁸」と探究したのである。ベイトソンの娘であるメアリー・キャサリン・ベイトソンに言わせれば、ベイトソンが採ったひとつの戦略は「再定義」していくことであった。「『愛』、『智』、『精神』、『聖』といった、非唯物論者たちにとっては重要だが、科学者たちからはおうおうにして研究対象にならないとみなされるような事象をさすことばを取り上げ、それらをサイバネティックスの諸概念を起用して再定義⁹」していこうとしていたといえるのである。

このように、ベイトソンが思考していた知の領域としては、システム理論、サイバネティックス、全包括的医学、生態学、ゲシュタルト心理学などに近いところだと言することができる。ベイトソンは、どこかひとつの領域に徹底して関わったわけではない。むしろ、メアリー・キャサリン・ベイトソンが「グレゴリー・ベイトソンの知を脱構築して、心理学、システム理論、人類学の学域別にきれいに編みなおしたのでは、彼が理解の光を当てようとした一番重要な部分が曇ってしまうことになる¹⁰」と述べるように、領域別に細分化していけないところこそ、ベイトソンが精神と自然の一元論を目指したひとつの現われであると考えられるであろう。ベイトソンの思想の影響を受けたという思想家の一人にフリッチョフ・カブラがいる。カブラは高エネルギー物理学者であり、現代物理学と東洋神秘思想との関連を説く研究を続けているが、彼の問題意識もまた、機械論的世界観の限界に結びついたものであり、「物理的思考」からシステム思考への移行を試みた人物であった。カブラは、「断片化と過度の専門化を特徴とする時代において、ベイトソンはパターンの背後にあるパターン、構造の裏にあるプロセスを探ることにより、いくつかの科学分野の基本的前提および方法に異議を申し立てた。彼はあらゆる定義の基本を関係に置くべきだと主張したが、その最大の狙いは、観察したすべての現象のなかに組織化原理を発見するところにあった。彼のいう『結び合わせるパターン』である¹¹」という。つまり、「具象物から関係への転換¹²」を促していたのがベイトソンなのである。そしてまた、「科学思想に対するベイトソンのもっともすぐれた貢献は、精神の本質についての彼の考え方だったと思う。彼の創出したまったく新しい精神の概念は、わたしの目には、西洋の思想と文化に数えきれないほどの問題を引き起こしたデカルト的分裂を、初めて本当に乗り越えた試みと映る¹³」とカブラはベイトソンを評している。このように、ベイトソンは、脱デカルト的な思考を求めて、「関係」が基盤となる思考領域を展開しようとした思想家であるといえる。

2.2. エコロジー概念とベイトソン

次に、エコロジー概念に関わって、一般的なエコロジー概念とベイトソンの関わりについて整理しておきたい。「エコロジー」という概念の誕生には2つの流れがある。まず、生態学の名そのものは、ドイツの動物学者であったエルンスト・ヘッケルが1866年に造った言葉である。これは、「対象的『自然』の客体的科学としての生物学、その一分野としての『生態学(Oekologie)』¹⁴」のことであった。生態学とは、生物とその環境のあらゆる相互作用について研究する学問である。また、生態学は同じオイコスを語源とする経済学（エコノミー）との共通性も大きい学問である

とされている。他方、「自然環境と共生しうる生活・経済社会の形成をめざして、民衆の生活の場から諸学を統合していく主体的科学にして社会的運動であるエコロジー (Ecology)¹⁵」は、1892年に、アメリカのエレン・スワローが提唱した。このスワローの提唱したエコロジーの意味が、現代のエコロジー・ブームに繋がっているといえる。「スワローは、ヘッケルが提唱するエコロジー (Oekologie) の語源であるギリシャ語のOekosが『すべての人の家』であることを知り、その家 (=環境) を望ましいものにしようとする社会運動にこの語をあてた¹⁶」とされている。スワローは、「家政学(ホーム・エコノミクス)の母」とも称されている。また、アメリカのエコロジー運動は、1960年代、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』の出版を機に大きくなったが、この時の運動は70年前のスワローの思想を受け継いだものであったとされている¹⁷。従って、生物学の分野から出てきた生態学と、環境と生活の科学としてのエコロジーとは、関連しつつも同一ではないといえる。

また、1973年には、ノルウェーの哲学者アルネ・ネスが「ディープ・エコロジー (deep ecology)」という概念を提唱した。ディープ・エコロジーとは、人間と自然はひとつであるという認識に基づいた深く長期的なエコロジー運動を意味している。「関係的・全体的場 (the relational, total-field)¹⁸」のイメージを支持し、人間と自然の関わり方そのものを問い直すという意味で、人間と自然について「より深い」問いかけを行うものである。他方、汚染と資源枯渇と戦い、先進諸国の人々の健康と豊かさを中心目標として、「環境における人間¹⁹」というイメージの下に進められてきた環境保全の活動を、ネスは「シャロー・エコロジー (shallow ecology)」と名づけた。シャロー・エコロジーは、人間による経済成長優先主義や物質主義それ自体の価値観は問わないままに、人間の社会的仕組みを維持した中で自然を管理・保全していくという、あくまで「最初に人間ありき」の人間中心的な自然の捉え方に基づいた環境保全の考え方であるとされている。

そして、環境破壊や公害問題が表面化してくるにつれて、それを解決する学問分野として生態学が近年また注目を受けるようになってきている。日本でも、21世紀に入ってエコロジー、エコという言葉が頻繁に使用されるようになってきているが、生態学の名を受け継いだ、文化的・社会的・経済的な思想や活動の総称のようなものとして使用されていることも多いのが実態である。

ベイトソンがエコロジーという言葉を用いるようになるのは、ベイトソンの人生の最後の10年くらい、つまり1970年代である。1970年代は、環境破壊などが問題となってきてエコロジーの思想が再び広まってきた時代であるといえよう。ベイトソンは、「エコロジーの思想が広がりつつある。この思想も、生まれるそばから政治と商業の場に持ち運ばれ、矮小化されてしまっているのが実状ではあるが、ともかくも、今なお人間の心の中に、統一を求める衝動、われわれをその一部として包み込む全自然界を聖なるものとして見ようという衝動が働いていることは確かである²⁰」と述べており、エコロジーの思想への期待を意識しつつも現実の意味的矮小化を懸念していたことがうかがえる。ベイトソンの展望するエコロジーとは、精神と自然の統一体の中で揺れ動く生のネットワークであり、ディープ・エコロジーの思想の方に近い意味をもっているであろう。そしてまた、近年頻繁に使用されているような、環境保全を目指した活動がすべて含まれるような単純な意味でのエコロジー運動の立場とも異なるといえるであろう。ベイトソンの思想は、単純な自然保護や自然賛美とは異なった自然との関わりのあり方が模索されており、

「関係」という視点から捉えていくエコロジーを探究していたのである。人類学者であり社会学者であるピーター・ハリス・ジョーンズは、ベイトソンの再帰的なもの（a recursive vision）の見方はエコロジカルな理解に対して必要であり、ベイトソンは今世紀で最もオリジナルな社会学者の一人であると評価している。そして、スタンダードのエコロジーは、エコシステムのバイオマスと、生命を支えているエネルギーの予算に集中し、ひとつのエコシステムを集合した生物量、つまり主要な特徴がエネルギーの入出であるエネルギーシステムとして考える結果、環境の秩序の説明は出来事に関するこの物理的な位置づけに重きをおいた表現になり、量的な分析に重きが置かれてしまう、ということに対してベイトソンが批判的に考えていたことをジョーンズは指摘している²¹。ベイトソンは、「エコロジカルな科学におけるエラーの基本的な出所が、量的な測定を通じて、エコシステムを"コントロール"し、"マネージする"ことができるという誤った前提にあるということに、同時代の人たちよりもかなり早くに気づいていた²²」のである。そして、ベイトソンは、人間の誤った考えのひとつは、それ自身が部分である相互作用的なシステムについて全体的な支配ができるという前提で考えていることであると、ベイトソンのいう「エコロジカルなエピステモロジー」によって、自然を支配するというすべての前提一隠されたあるいは公然の一は取り除かれると考えていたのである。

3. ベイトソンの「精神のエコロジー」という思想

3.1. 精神システム

ベイトソンは、「精神（Mind）」に対して物心二元論とは異なる新しい捉え方を提示した。ベイトソンによると、「精神」とは、身体にのみ内在するものではなく、身体の外側にある様々な経路やそれをつくっているシステムの中にも存在するものである。またさらに、そうした個々の精神を小さなサブシステムとして組み込んだ、広大な「精神」があり、この「精神」は神にもたとえることができるだろうという。そして実際、このシステムを指して神として生きている人たちもいるが、これはあくまでも、部分同士が内部で結びあわさった、社会システム全体とこの惑星のエコロジー全体に内在するものであるという²³。「生命世界に目を向けたベイトソンは、そこに見られる多様な組織化原理が本質的に心的（メンタル）なものであり、精神が生命のあらゆるレベルで物質に内在していることを看破した²⁴」とカブラは評している。

そして、精神と身体二元論を解消するための、世界を二元化しない「精神（Mind）」の定義として、ベイトソンは以下のことを挙げる²⁵。

1. 「精神とは相互作用する部分（構成要素）の集まりである。」
2. 「精神の各部分間の相互作用の引き金は、差異によって引かれる。」差異とは時間上にも空間上にも位置づけられない非実体的な現象である。差異はエネルギーにではなく、負のエントロピー／エントロピーに関係する。
3. 「精神過程はエネルギー系の随伴を必要とする。」
4. 「精神過程は、再帰的（リカ-ヅル）な（あるいはそれ以上に複雑な）決定の連鎖を必要とする。」
5. 「精神過程では、差異のもたらす結果を、先行する出来事の変換形（コード化されたもの）と見ることができる。」変換のルールは、比較的（すなわち変換される内容より）安定したものでなくてはならないが、それ自体変換を被ることもありうる。

6. 「変換プロセスの記述と分類は、その現象に内在する論理階型のヒエラルキーをあらわす。」
 ベイトソンは、差異についての認識と、その相互作用のシステムが多層的な論理階型構造によって組織化されているという認識によって、「精神過程を二つの別個な“実体”を想定せず、単純な物理的・機械的運動と区別して体系的にとらえるための一連の概念群²⁶」を手にしたのである。そして、「思考」「進化」「エコロジー」「生」「学習」などの現象は、上の基準を満たすシステムでのみ起こるということをベイトソンは主張するのである。ベイトソンは、説明の本質が「情報」ないし「比較」にあるようなところには必ず精神過程があると考えている。そして、細胞も森林も文明全体もすべてメンタル・システムとしての特性を備えているのだという。また、情報とは「差異を生む差異」として定義することができ、末端感覚器官もまたひとつの比較器、つまり差異に反応する装置なのである。その差異への反応能力をもって、その機能を「心的、精神的」と捉えているのである²⁷。精神とは、「やってくる情報に自己修正的に対応する能力をもったシステム」であり、「精神過程の世界は、情報がさらなる情報を生む入れ子式の自己組織化世界へとひらかれている²⁸」のである。

ここで、「自己」という精神システムの一例を表してみると、ピアノを弾いている人を考えた場合、その人の「自己」とは、ピアノと指の皮膚を境とした身体とを境として分かれるのではなく、ピアノと身体とが一体となってひとつのシステムを作り、そのシステムがより大きなシステムのなかで境界を移動させていると考えることができる。身体だけでなく、鍵盤や弦をもく自己システムの一部としながら、音楽を奏でているのである。鍵盤の一打一打は、前回奏でた音との関係によって制御されている。コミュニケーション論から見ると、「ピアノ（鍵盤－ダンパー－ハンマー－弦）－目－脳－筋－指－打－ピアノ」のシステム全体がフィードバック・ループをなして、最初の一打がもたらした「差異」の情報がその回路を循環し、次の一打に影響を与え、自己修正しながら全体としてひとつの音楽を奏でているプロセスとみることができる。このような差異が循環しながら、差異が引き金となってエネルギーが引き出されるという相互作用の連続を、精神過程とベイトソンは名付けるのである。また、ベイトソンは、機械論的な人間観を批判するために精神過程のモデルを示していたといえるが、その根拠となるエピソードのひとつとして偽薬（プラセボ）の話を持ち出している。「偽薬が効くのは、人間の生、つまり人間の治癒とか苦しみとかが精神過程の世界に属するってことの証し²⁹」となるからである。これは、やはり精神と身体を切り離しては私たちの生きたシステムを考えることができないということを示した一例といえよう。

そして、最後にベイトソンの精神のエコロジーを捉える上で言及しておくべきことは、そのエコロジーに「聖なるもの (the sacred)」をみていたということである。その精神のエコロジーがもつビジョンとして、「世界が一つの美的な秩序のもとに統一されるという感覚³⁰」をもっており、ベイトソンの試みは、「非二元論的な世界観のもとで、新しい聖の概念がどう立ち現れてくるかを探る試み³¹」でもあったのである。そして、ベイトソンは「神」を語るためのひとつの立脚点として「聖なるもの」を見出したといえる。

3.2. 柔軟性

ベイトソンは、3.1.で述べたような人間と環境とをひとつのシステムへと統合し、その全体を

健康へと導くためには、きわめて大きな柔軟性が必要であることを指摘している。そして、ベイトソンは、人間文明の健康なエコロジーとは、「人間の高度文明と環境とが合体した一つのシステムにおいて、文明の柔軟性と環境の柔軟性とが協働し、根底的な（"ハードプログラム"された）諸特性のゆるやかな変化をも連れ立ちながら、たゆまざる前進を続ける状態³²」であるとし、「実際、システムの健康の鍵は、その柔軟性にあるとあってよい。個々の変数値やその傾向を知ること以上に、それらの諸傾向がエコロジカルな柔軟性の増減にどう関わるかを知ることの方が重要なのだ³³」と考えていた。またベイトソンは、「"高度"の文明と呼ぶためには、また、人々が必要なく智>を保ち、身体的・美的・創造的なよろこびをもって生きていくための要件が（教育・宗教において）整っていないてはならない。人間の心の柔軟性と文明全体の柔軟性がマッチすることが重要だ。人間の遺伝的、経験的多様性に見合うだけの多様性を文明が持つというだけでなく、予測されない変化に臨んでもそれに十分対処できるだけの柔軟性—"事前適応性（pre-adaptation）"を文明が持っている必要がある³⁴」と考えていた。ベイトソンは、柔軟性というものを「どんな方向へも向けられていない潜在的な可変性³⁵」として定義することが可能であるとしている。例えば、綱渡りをする人が綱の上に立てるということを考えてみると、腕の位置や腕の動きの速度あるいは身体バランスの諸変数に非常に大きな柔軟性が与えられているからこそ、そのようなことが可能なのであろう。生きている（すなわちエコロジカルな）システムには、バランスを自己修正する働きがあるのである。そして、柔軟性があるからこそ安定が保たれる、また逆に、柔軟性があるからこそ、変化の可能性にも富んでいるといえる。

このように、エコロジカルな柔軟性とは、言い換えれば、システムの柔軟性に関わるものであろう。「精神のエコロジー」によるシステムは、常に自己修正的なプロセスでもって円環的に動いているダイナミックなプロセスである。それは、動かずに静止しているようなシステムではない。柔軟性を保つためには、多様性が必要だというベイトソンの考えもひとつ着目できる点であろう。ベイトソンは、「行動の柔軟性にしても、ときどき習慣を破ることで、それを培おうとする人は少ない³⁶」と述べており、これは私たちに自ら行動の柔軟性を保つ余白をつくることを促しているようにも読み取れるように、私たちにあって柔軟性のエクササイズということはエコロジカルな生涯学習へのひとつの鍵となりうるのではなかろうか。

4. ベイトソンの「精神のエコロジー」の生涯学習への含蓄

4.1. 精神システムにおける学習

ベイトソンは、「学習」という現象は、精神のシステムにおいて生じるものであると考えていた。また、精神のエコロジーとは、自己修正的、循環的適応ループによる論理階型の違いに基づいた存在分類の雛形でもあった。ここで、ベイトソンが提示した「学習とコミュニケーションの階型論」を簡単に紐解いておくと、数理哲学者バートランド・ラッセルの論理階型論に従って、ゼロ学習、学習Ⅰ、学習Ⅱ、学習Ⅲ、学習Ⅳという階型が示されている。これらの学習の階型をなしているコンテキストもまた論理階型の構造をもっており、学習の階型が上がるに従って、コンテキストの構造もまた非連続に広がっていく。

ゼロ学習とは、「反応が一つに定まっている³⁷」場合であり、試行錯誤的行動は含まれない。無条件反射や、サーモスタットなど多くの機械装置の反応がそうである。学習Ⅰは、「反応が一

つに定まる定まり方の変化であり、すなわちはじめの反応に代わる反応が、所定の選択肢のなかから選びとられる変化³⁸である。ここでは、毎回毎回の自己修正の試行錯誤がなされている状態である。学習Ⅱとは、「選択肢群そのものが修正される変化や、経験の連続体が区切られる、その区切り方punctuationの変化³⁹」である。「学習することを学習する」階型であり習慣などが形成されていくプロセスでもある。上達するには学習というよりも練習が必要である階型でもあるといえる。そして、学習Ⅲとは、「代替可能な選択肢群がなすシステムそのものが修正されるたぐいの変化⁴⁰」である。「コンテキストのコンテキスト」の学習といえる。このとき学習Ⅱで習得された前提からの解放が得られるため、学習Ⅱでつくられた<自己システム>そのものにも変容がもたらされることになる。人間には稀にはあっても学習Ⅲが生じうる。しかし一方で、学習Ⅲへの飛躍がうまくいかなかった場合には、深いダブル・バインドに陥ってしまい病的症状に陥ってしまう危険性もある。学習Ⅲが展開していくと、自己そのものに一種の虚しさを感じられ、関係のプロセスのなかに溶出していく世界が現れるかもしれない。学習Ⅳとは、「<学習Ⅲ>に生じる変化⁴¹」であるが地球上に生きる有機体がこのレベルの変化に行きつくことはないだろうという。

このように、ゼロ学習、学習Ⅰ、学習Ⅱ、学習Ⅲというそれぞれの学習の階型において生じている学習の事象は、それぞれ精神システムの構造をもちながら生じている事象として捉えることができ、この精神システムは、<構造(ないし形態)>と<プロセス(ないし流れ)>との相互作用によって、ジグザグに進んでいく関係を為しているといえる。そしてまた、ベイトソンはこの精神システムとは、「ストカスティックなプロセス」であるとしている。生物の進化を例にとると、「生物が新しい突然変異を集めるのはランダムな世界からであり、試行錯誤による学習が解答を集めるのもランダムな世界からである。可能なかぎりの分化による生態的飽和をもって進化は終局相を迎える。学習は精神の飽和へと至る。まだ何一つ学んでいない、大量生産でつくられた卵に戻ることによって、種は繰り返し記憶の貯蔵庫を空にし、新しい知識を受け入れる用意を整えて、さらなる前進を開始するのである⁴²」というように、ランダム性と選択というふたつの機構が関わっており、ランダムな要素から新しいものが生まれてくると考えられるのである。このことは、先に述べた柔軟性の原理とも関わってくると考えられるだろう。

4.2. エコロジカルな生涯学習の可能性

ベイトソンが提起したような「精神のエコロジー」にもとづいた生涯学習としてどのようなことが考えられるであろうか。

まず、「学習」が起こっているとみなす単位が広がるということである。2つあるいはそれ以上の実体個別の中で完結してしまう現象ではない。そのような実体の枠組みは超えて、互いの関係性というシステムの中において、常に「差異」という情報を交換しながら、システム自体は自己修正されながら進んでいく円環的で動的なプロセスである。そして、そのシステムの中で動いているのは精神プロセスであり、私たちの身体それ自体の境界が問題になっているのではない。精神は、私たちの身体の境界を超えて互いに行き来しており、やはりこの「精神」という部分を抜きにしては生身の人間の中で起こっている学習の現象は捉えきれないであろう。私たちは機械ではない。学習を機械論的に客観的に構造的に言語で捉えたとしても、そこで掬いきれない部分が

必ず残る。それで全てではない、という意識を持っていることが大切なのである。ここで語っている精神とは、「誤りを犯すことも狂気に落ちることもなく至高精神」などではなく、人間関係やエコシステムに内在する、あまりにももろい精神のことを語っている⁴³⁾のであり、ヴァルネラブルな存在である精神を一体化して捉えていこうという姿勢に意味があると考えられる。

次に、学習の階型論と照らして改めて考えてみたい。主体や客体といった実体がなくなっていくエコシステムへと溶け込んでいくような世界である学習Ⅲの階型を、ベイトソンのいう「精神のエコロジー」に基づいた世界観の中でも特に精神と自然がひとつの統一体になりえたような「聖なる領域 (the sacred)」へと飛躍した状態として考えることができるのではないかと。学習Ⅲの階型を展望していたことがベイトソンの独自性でもあり、それゆえ究極的には学習Ⅲへの飛躍をベイトソン自身も目指していたと考えられる理論である。物心二元論的な世界観から、機械論でもなく超自然論でもない一元論的な世界観への転換、それは、学習Ⅱにおいて習慣として形成されていく階型に対して、その学習Ⅱをなすコンテキスト自体を改変していく学習Ⅲへのプロセスのひとつとして並行的に考えることができるであろう。このように考えると、学習Ⅲがきわめて創造的に展開した場合、「矛盾の解消とともに、個人的アイデンティティがすべての関係的プロセスのなかへ溶出した世界が現出することになるかもしれない⁴⁴⁾」、そして、「そこはすでに『自己』がその人的行動の組織者としてののはたらきを停止した領域であり、彼らこそ、失われることのない無垢の保持者だといえる⁴⁵⁾」という状態に至るのだらうということも納得することができる。そのような域に達することは、頻繁に生じるものではないが、そのような領域を理論として可能性の枠を考えておくことに意味があり、そのような究極的な域こそベイトソンが「聖なる領域 (the sacred)」と呼んだところなのであろう。しかしながら、学習Ⅲのみが、精神のエコロジーに基づいた世界観に転換した状態ということは意味していない。精神のエコロジーが志向している、精神と自然との一体性が見出せるような「聖なる」世界が現れた状態を学習Ⅲとして考えられるものの、精神のエコロジーという思考自体は、学習の階型論全体に関わるものであると考えられるからである。精神システムとは、言い換えれば自己をなしている〈自己システム〉のことであるが、それは精神のエコロジー全体をなしている〈エコシステム〉のサブシステムであり、その一部として捉えることができる。物心二元論を超えた、相互の関係性のネットワークとしての精神のエコロジーに基づく思考がそれぞれの学習の階型において反映されていくことになる。ベイトソンの学習の階型論では、学習の階型が上がるにしたがって、それをなすシステムの枠組みは大きくなっていく。階型間の関係は非連続であるものの、より大きなシステムへと働きかけることによって、そのサブシステムへの変化はもたらされることになる。したがって、ベイトソンの学習の階型論は、すべての学習の階型をひとつの全体として捉えることに意味があり、それらを精神のエコロジー的な思考によって読み替えていくことは、学習を常に関係性の中から捉えなおしていくことであり、それによって学習のもつ意味も変わってくると思われる。精神のエコロジーは、量的な基準で測りきれものではない。私たちは、ベイトソンの学習の階型論を、コンテキストを学ぶ階型、コンテキストのコンテキスト自体を変えていくような階型といったように構造的な側面のみに着目して理解するだけでなく、そこにベイトソンの提起していた精神のエコロジーの思考をきちんと組み込んだ形で理解していくことが重要となってくるであろう。エコロジカルな生涯学習とは、ベイトソンの精神のエコロジーの思考、つまり、〈自己シス

テム>あるいはそれをとりまく<エコシステム>との関係性の中で、ゼロ学習から学習Ⅲまでの学習の階型の事象を捉え直していくプロセスとして考えていくことができるのではなかろうか。

ここで、なぜそのような精神のエコロジーの思考が必要なのかということを改めて考えておく必要が出てくる。まず、ベイトソンの精神のエコロジーに示されているような思考によって、西欧近代的な「個」に絶対の価値を置こうとする思考からの解放を促すことができるようになる。その人（ものごと）の特性を知ろうとしたとき、いくらその人（ものごと）をその人（ものごと）の関係の外側に引き出してみても何もつかみとることはできない。ベイトソンは、「自分の関心は自分であり、自分の種だという偏狭な認識論的前提に立つとき、システムを支えている、他のループはみな考慮の“外側”に切り落とされることになります。人間生活が生み出す副産物は、どこか“外”に捨てればよいという心がそこから生まれ⁴⁶」てしまい、そのことが環境の汚染にも繋がるということを指摘していた。自己、会社、国家、種への関心への行き過ぎが、それ以外の見方で人間と環境との関係を捉えていくことを不可能にしてしまうという危機感を抱いていたのである。「個」を中心にした思考は、円環をなして進む出来事のシステムを短く切断していつてしまうからである。人間も環境もお互いを創造しあっている関係のマトリックスの中で常に捉えていくことが、互いのよりよい生存のためにも必要なことのはずである。ベイトソンは、部分が全てではないということを強調し、円環的なシステムのうち弧の部分だけを捉えてそれが物事の全てであると捉えてしまいがちな私たちの思考に警鐘を鳴らしていた。人や社会や環境が、大きな精神システムがつくるエコロジーの一部に過ぎないという認識をもつこと、つまりそれは人間が自然との関係においては、自然を支配するとか自然を人間が保護するというような立場ではなく、人間も自然も同じシステムの中に共に存在する生命体として、自然や環境に対して人間がより謙虚な姿勢をもっていくことを促しているのではないか。このような意味において、ベイトソンのいう精神のエコロジーに基づいた実践とは、単純な意味でも自然保護や自然賛美とは異なるといえるであろう。ベイトソンは、「パワーとコントロール」の思考が幅をきかせる世界に対して問題を感じ、また人間中心主義に陥っていかないようなネットワークシステムを思考していたのである。従って、ベイトソンのいうエコロジカルな生涯学習とは、単に環境保護に関わるような学習をすることのみを意味してはいないといえる。エコロジカルな生涯学習の実践とは、もちろん、環境や自然に関わるその結びつきのネットワークを学び、関係を繋いでいくことも含まれるが、人間もエコシステムの全体の一部をつくりながら生きていることの喜びを感じて生きること、また、精神のエコロジーに基づく思考へと私たちの思考の前提を変化させていこうとするプロセスそのものを意味するのではないだろうか。そこへの道筋は幾通りもあるだろう。そのように考えていくこと自体がすでにそのエコロジカルな生涯学習のプロセスに入っており、生涯学習の実践として考えていくべき課題のひとつなのである。

5. おわりに

ここで、ベイトソンが生態学的危機であると考えていた現代文明に対する支配的な観念の諸々を改めて挙げると以下の通りである。「a-われわれと環境とを対立させて捉える思考、b-われわれと他の人間とを対立させて捉える思考、c-個人が（あるいは個々の企業や国家が）重要であるとする心、d-環境を一方的unilateralに制御することが可能であり、またそれを目指すべ

きだとする思い、e-われわれは限りなき"フロンティア"を進んでいるという楽天主義、f-経済がすべてを決定するという"常識"、g-テクノロジーが解決してくれるという無責任⁴⁷である。本稿において、ベイトソンの精神のエコロジーという観点からアプローチし、それらを生涯学習の実践へと繋げていく示唆を得ようとした。これまで筆者は、ベイトソンの学習Ⅲの概念が、宗教的回心や覚醒といった非現実的な神秘的な事象をさす階型と同義として捉えられる危惧があったために言及することに躊躇してきた。しかし、学習Ⅲを、精神のエコロジーの中に現れてくる「聖なるもの (the sacred)」という感覚と類似した事象として把握することによって、ベイトソンの学習論と精神のエコロジーの繋がりをより明確にする契機を見出せたように思う。また、同時に、精神のエコロジーの思考は、「聖なるもの (the sacred)」という域にまでは達しないものの、精神のエコロジーに基づく思考を学習の階型論全体に対して反映させ捉えなおしていくことは、エコロジカルな生涯学習の実践へと繋がるであろう。精神のエコロジーという観点から考えることによって、学習という現象をより広い視野から捉えていくことが可能になった。ベイトソンのコミュニケーション論を契機として生涯学習の理論や実践を考えていくということは、私たちの認識論に関わってくることであり、容易にそして短期的に可能なことではない。生きた世界には「結び合わせるパターン」の網の目が限りなく広がっているように、ベイトソンの思い描いていたような精神のエコロジーの思考に近づいていくためには、どのような実践が可能かということを経期的なスパンで考えていくことは更なる今後の課題である。

¹ 拙稿「G.ベイトソンとE.モランの<自己>概念をめぐる考察—自己教育を考えるためのノートとして—」『京都大学 生涯教育学・図書館情報学研究』第4号、2005年、pp.161-176。拙稿「日常の実践としての学習理論—G.ベイトソンとJ.レイヴ&E.ウエンガーのAlcoholic Anonymous (AA)をめぐる考察を手がかりに—」『京都大学 生涯教育学・図書館情報学研究』第5号、2006年、pp.91-102。拙稿「G.ベイトソンのコミュニケーション論における生涯学習への展開」『京都大学大学院教育学研究科・北京師範大学教育学院 学術交流協定締結記念日中教育学系合同シンポジウム論文集』2006年、pp.93-100。

² Bateson,G., *Mind and Nature: A Necessary Unity*, New Jersey,2002 (Originally Press 1979),p.203. (佐藤良明訳『精神と自然—生きた世界の認識論 (改訂版)』新思案社、2001年、p.297.以下、M.N.と略記。)

³ Bateson,G.&Bateson,M.C., *Angels Fear: Towards an Epistemology of the Sacred*, New York, 1987,pp.11-12.(星川淳訳『天使のおそれ：聖なるもののエビステモロジー (新版)』青土社、1992年、p.29.)

⁴ *ibid.*,p.59.(邦訳p.107.)

⁵ *ibid.*,p.53.(邦訳p.96.)

⁶ *ibid.*,p.12.(邦訳p.29.)

⁷ *ibid.*,p.63.(邦訳pp.112-113.)

⁸ *ibid.*,p.64.(邦訳p.113.)

⁹ *ibid.*,p.7.(邦訳p.22.)

¹⁰ Bateson,G.,*Steps to an Ecology of Mind*, Chicago and London,2000.(Originally Press 1972), p.xiii. (佐藤良明訳『精神の生態学 (改訂第2版)』新思案社、2000年、p.(9). 以下、S.E.M.と略記。)

¹¹ Capra,F., *Uncommon Wisdom*, New York,1988,p.73. (吉福伸逸、田中三彦、星川淳、上野圭一訳『非常の知』工作舎、1988年、p.84.)

¹² *ibid.*,p.73.(邦訳p.84.)

¹³ *ibid.*,p.83.(邦訳p.99.)

- 14 Clark,R., *Ellen Swallow: The Woman who Founded Ecology*, Chicago,1973. (工藤英明訳『エコロジーの誕生—エレン・スワローの生涯』新評論、1994年、p.318.(訳者あとがき))
- 15 *ibid.*,邦訳p.318.(訳者あとがき)
- 16 村杉幸子「エコロジーという言葉—創唱者エレン・スワローとその時代」(日本自然保護協会編『自然保護』No444、2000年3月、p.7.)。
- 17 Clark,R.,*op.cit.*,邦訳p.310.
- 18 Naess,A.,translated and edited by Rothenberg,D., *Ecology, Community and Lifestyle: Outline of an Ecosophy*, Cambridge,1989,p.28.(斎藤直輔、開龍美訳『ディープ・エコロジーとは何か—エコロジー・共同体・ライフスタイル—』文化書房博文社、1997年、p.48.)
- 19 *ibid.*,p.28.(邦訳p.48.)
- 20 Bateson,G.,*M.N.*,p16.(邦訳p.24.)
- 21 Harries-Jones,P., *A Recursive Vision: Ecological Understanding and Gregory Bateson*, Toronto,1995,pp.3-5.
- 22 *ibid.*,p.7.
- 23 Bateson,G.,*S.E.M.*,p.467.(邦訳pp.611-612.)
- 24 Capra,F.,*op.cit.*,p.85.(邦訳p.101.)
- 25 Bateson,G.,*M.N.*,pp.85-86.(邦訳pp.125-126.)
- 26 Bateson,G.&Bateson,M.C.,*op.cit.*,p.14.(邦訳p.32.)
- 27 *ibid.*,p.17.(邦訳p.37.)
- 28 *ibid.*,p.19.(邦訳p.41.)
- 29 *ibid.*,p.65.(邦訳p.116.)
- 30 Bateson,G.,*M.N.*,p17.(邦訳p.24.)
- 31 Bateson,G.&Bateson,M.C.,*op.cit.*,p.14.(邦訳p.33.)
- 32 Bateson,G.,*S.E.M.*,p.502.(邦訳pp.654-655.)
- 33 *ibid.*,p.504.(邦訳p.656.)
- 34 *ibid.*,p.503.(邦訳p.656.)
- 35 *ibid.*,p.505.(邦訳p.658.)
- 36 *ibid.*,p.511.(邦訳p.665.)
- 37 *ibid.*,p.293.(邦訳p.399.)
- 38 *ibid.*,p.293.(邦訳p.399.)
- 39 *ibid.*,p.293.(邦訳p.399.)
- 40 *ibid.*,p.293.(邦訳p.399.)
- 41 *ibid.*,p.293.(邦訳p.398.)
- 42 Bateson,G.,*M.N.*,p.45.(邦訳p.63.)
- 43 Basteon,G.,*S.E.M.*,p.493.(邦訳p.642.)
- 44 *ibid.*,p.306.(邦訳p.415.)
- 45 *ibid.*,p.306.(邦訳p.415.)
- 46 *ibid.*,p.492.(邦訳p.640.)
- 47 *ibid.*,p.500.(邦訳pp.651-652.)

(生涯教育学講座 博士後期課程2回生)

(受稿2006年9月8日、改稿2006年11月28日、受理2006年12月7日)

A Possibility of Ecological Lifelong Learning: Taking the Gregory Bateson's Communication Theory as Opportunity

YASUKAWA Yukiko

In Gregory Bateson's communication theory, the idea of ecology prevails here and there. I have studied about Gregory Bateson, especially from "the logical categories of leaning and communication". But it was still difficult for me to understand profoundly. So my challenge in this paper was to clearly present the idea of ecology by Bateson clearly and to rethink it from the perspective of learning theory. I am assured that these two themes are very related. In fact the idea of ecology by Bateson meant the idea of "ecology of mind". It means the cybernetic system, including people, society and environment. And they are corelated with one another. Bateson criticized dualism, because separating mind and body bring cuts into our relational system. We are not machines; we live in a living world. I could show a parallel relationship between the upper category of learning (LearningⅢ) and the idea of "ecology of mind" especially in "the sacred" level. Considering how we can rethink Bateson's learning categories totally from the epistemology based on Bateson's idea, "ecology of mind" is an important practice for our lifelong leaning.